

# 明大—台大

## 神経生物学・認知脳科学シンポジウム開催報告

2016年8月8日  
明治大学大学院 理工学研究科 電気工学専攻  
小野弓絵, 梶原利一, 工藤寛之, 嶋田総太郎

2016年7月17,18日の2日間にわたり, 国立台湾大学生物科学研究院ならびに心理学研究院の教員・大学院生を明治大学生田キャンパスに迎え, 明大—台大 神経生物学・認知脳科学シンポジウムを開催しました。

本シンポジウムは2013年度・2015年度大学院学内GPとして実施された「国立台湾大学 大学院生との研究交流プログラム」における研究交流, ならびに2014年度4月・9月に行われた「明大—台大 認知脳科学・精神科学ジョイントワークショップ」「明大—台大 神経生物学・認知脳科学シンポジウム」に引き続いて行われた台湾大学との研究交流事業です。台湾大学側の参加者12名(うち教員3名), 明治大学からの参加者44名(教員6名), 他大学など外部からの参加者6名の合計62名が参加する盛会となりました。2日間にわたり, 台湾大学・明治大学の教員, 理工学研究科の若手研究者(助手)らによるレクチャーと, 日台大学院生のポスターセッションを通じた研究交流を行いました。

2016 Meiji-NTU  
Neurobiology and Cognitive  
Neuroscience Exchange Program



シンポジウムプログラム



レクチャー会場の様子 (生田キャンパス)



台湾大学心理学研究院の葉教授による教育講演



学生からも多くの質問がありました



ランチタイムでの一コマ

17日は教育講演”Technology to measure human cognitive function”として、台湾大学大学院心理学研究院の葉素玲教授、本学理工学研究科の小野弓絵准教授（電気工学専攻）、北海道大学大学院保健科学院の横澤宏一教授より非侵襲脳機能イメージングと認知神経科学への応用に関する講義が行われました。台湾大・明治大とも2回目の参加というリピーター学生も多く、教員のみならず、日台の学生からも活発な質問が行われて有意義な議論となりました。

翌18日は、理工学部長の久保田寿夫教授（電気電子生命学科）より台湾大学関係者への歓迎のご挨拶をいただき開会となりました。午前中のセッション”Imaging and evaluation of pain and motor function”では、台湾大学の張芳嘉教授より睡眠障害モデルラットを使った鍼灸治療の神経科学的効果についての講演、嚴震東教授から皮膚末梢の感覚受容器を非侵襲的に可視化する新しい技術についての講演を頂きました。明治大学からは電気電子生命学科の座間助手より発表があり、脳波と近赤外分光法の同時計測を応用し、実際の運動が行われる以前に脳から運動意図を検出する技術の発表がありました。前日に引き続き、日台の学生から質問があり、教員・大学院生を交えての討論が行われました。



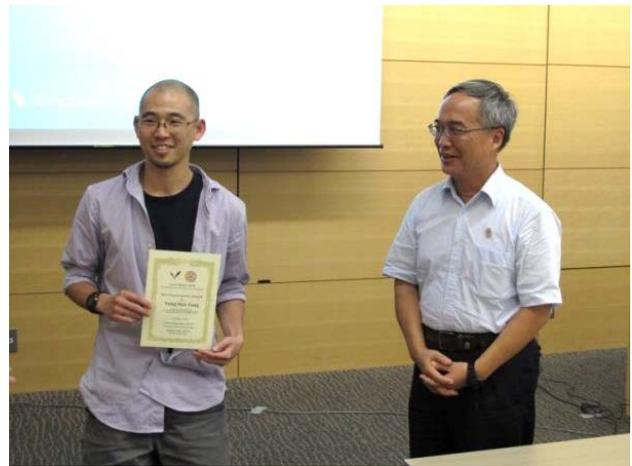
電気電子生命学科 座間助手による講演



活発な質疑応答が行われました



学生ポスターセッション



優秀ポスターには賞状が贈呈されました

昼食後のポスターセッションでは日台から合わせて 24 件のポスターが発表されました。小グループに分かれ、教員のガイドによるポスターツアーの後、1 時間半のフリーディスカッションを行いました。特に日本人の学生は、英語による質疑応答を通じてコミュニケーションのもどかしさを感じた者も多く、今後の英語学習への大きなモチベーションとなったようです。

午後の講演セッション” Behavioral and emotional modulation of perception”では、葉素玲教授に再度ご登壇いただき、多種感覚統合についての最新研究をご発表いただきました。さらに関連したトピックとして、電気電子生命学科のアリフ助手から視覚と体性感覚の時間的統合の認知メカニズムを解明する robot hand illusion の研究発表を、都地助手からは社会不安傾向と視線認知特性の相関性についての研究発表がありました。研究プログラムの終了後には、優秀ポスター賞の発表と表彰を行い、明治大学からは博士前期課程 1 年の和歌山ゆうかさん（梶原研究室）、アズィムアティラーさん（嶋田研究室、JAD 留学生）、関直人さん（小野研究室）に、台湾大学からは楊詠皓さん（葉研究室）に優秀賞が送られました。その後、生田キャンパスダイニングホールスクエア 21 にてシンポジウムの懇親会を開催しました。

今年で4回目を迎える台湾大学との研究交流行事について、葉素玲教授、嚴震東教授からは、本行事に対する台湾大学の学生の関心が毎年非常に高く、心理学研究院では希望学生を選抜して派遣していることなどを懇親会の席で伺いました。ベテランの研究者が多く集まる学会と異なり、年の近い学生同士で数日間を共に過ごし、自らの研究やそれ以外のことについても自由に語り合える場を提供できるということが、本研究交流行事の特色となっていることを実感しました。今後もこの特色を活かしつつ、この交流行事を巣立った学生が研究者としてまた講演に戻って来てくれるよう、今後も交流を継続して行く予定です。最後になりましたが、本シンポジウムへの手厚いサポートをいただきました国際連携本部ならびに国際連携事務室の皆様には厚くお礼申し上げます。



懇親会にて集合写真